

高校生クイズ勝手に回顧録

渡辺 公恵（旧：渡辺 毅）

もう32年も前のことになりましたけど、気に留めてくださる方々がいらっしゃるようですので、わたしが宮城県（立）仙台第二高等学校チームとして出場した第5回全国高等学校クイズ選手権（1985年の年末）の思い出を書いてみます。

3と1の次は2の番だ

予選の日までの、1985年11月現在の校内の空気を思い返します。

高校生クイズはそれまで4回行われていましたが、宮城県の学校では、第2回（84年夏）に仙台第三高校（三高）、第3回（84年冬）に仙台第一高校（一

高) が全国大会に出場しています。この2校と我が仙台第二高校(二高)は「一・二・三」ということで男子校の「ナンバーズクール」と呼ばれ、何かと比較される関係にありました(特に二高と一高が)。進学実績的には、我が二高がトップで一高がそれに肉薄し、三高はやや離されるが仙台地区男子校では数字どおり第三位、というポジションでありました(あれから数十年経った今でも、基本的な傾向は同じです)。一応トップ校のはずなのに高校生クイズ全国大会はまだ、という状況を屈辱に感じる二高関係者は多かつたはず(参考までに、仙台地区では女子校にもナンバーズクールがありまして、その中の第一女子高校(当時)は第2回高校生クイズで優勝しています。現在ではこれらのナンバーズクールはみんな共学化されまして、第一

女子は宮城第一と名前が変わりましたが、それはまた別の話ということで)。

三高と一高に先を越されてしまったが、第5回こそ二高も全国大会に行こう。そういう気運が、あのころの校内では高まっておりました。仙台での開催という地の利もあって、同級生にも高校生クイズ参加者が何チーム分もいました。

全国放送の東北地区予選の冒頭にも、二高と一高の応援団が映っています。エール合戦もあって、うちらとライバル校とはクイズの前から共に盛り上がっておりました。

もがみがよの件

高校生クイズ史上に残る珍解答として有名な、第5回東北予選決勝での相馬高校の「さみだれを あつめてはやしもがみがよ」。わたしはあの現場に立ち会っていました。それどころか、あの珍解答が生まれるきっかけを、わたしが作っていたともいえるかもしれません。

クイズ形式は、パネルに隠された俳句を当てるものでした。早押しクイズに正解すると、五十音から一つの文字を指定してその文字のパネルを開くことができ、俳句を答えるチャンスが与えられます。俳句を一字一句正確に言えれば勝ち抜けです。勝ち抜けチームは4つなので俳句も4句ありました。

まず青森県の弘前高校チームが抜けました。もうひとつの仙台第二高校チー

ムが抜けました。残る席は2つ、俳句も2つ。そのうち片方がわたしには目星がつかしました。おそらく与謝蕪村です。あと一文字、冒頭に「は」が入れば間違いなくあの句です。わたしは少々気が逸っておりまして。一問押して誤答しました。一方で、チームメイトのふたりはもう一方の句に目星をつけたようで、上の句を小声でつぶやいています。

チームメイトが押してクイズに正解しました。道理としてはそのチームメイトが文字を指定する場面ですが、わたしは割り込むように大声で「は」と文字を指定しました。果たして冒頭に「は」が開きました。気迫に押されたか、チームメイトもわたしに答える場を譲ってくれました。「はるのうみ ひねもすのたり のたりかな」。わたしたちの勝ち抜けが決まりました。

さて残りは1チームで俳句も1つ。例の句です。半分くらいパネルが開いており、特に下の句は「○がみが○」まで開いた状態となっていました。

後はもう言うまでもなく相馬高校の独壇場でした。わたしたち勝者は、解答者席の後ろにあった勝者席から、一部始終を聞いておりました。振り返れば様子を見ることもできましたので、ちらちら背後を見ながら爆笑しておりました。

つまり、わたしが「はるのうみ」の句を答えてしまったのが、相馬高校の「もがみがよ」の珍解答につながったのです。わたしのチームメイトがクイズに正解したとき、彼がそのまま「さみだれを」の句を正解していれば、こうはなりませんでした。もっともそのときは、「はるのうみ」がらみで珍解答が誕生していたかもしれません。

「夕やけニャンニャン」ありがとう！

全国大会、宅Q便クイズ（解答者の自宅で解く宅配クイズ）で勝ったおかげでホテルに泊まりました（正確には、泊まれるかはまだ確定していなかったが、わたしたち解答者はそれを知らなかった）。

そのホテルのテレビで午後5時から6時まで、わたしは普段はめったに見ていなかった「夕やけニャンニャン」を見ました（おニャン子クラブが出てました。そういう番組があった時代でした。日本テレビでなくて失礼）。最新洋楽情報みたいなコーナーがあって、「『Take On Me』がヒット中のノルウェー出身のバンド、A~ha（アーハ）」と紹介映像が流れてまして、それが妙に印象に残ってました。

そしたら、この日の夜にあった「お泊

り300問ペーパークイズ」で、そのことが出題されたのです！ 「A～h aはどここの国のバンド？」もちろん「ノルウェー」と正解させていただきました。他局の番組でも、見ておくといいいことがあるものですね（笑）

なお、番組を見返すと、敗者用のプレハブにはテレビはなかったようですね。わたしが宅Q便クイズに負けてあのプレハブに滞在していたら、A～h aの問題はわからなかったことでしょう。

余談ですが、宅Q便クイズとお泊り300問クイズの関係はよくわかりません。わたしは当時は、宅Q便クイズの結果をチャラにして、お泊り300問の結果だけで新たに勝者10チームを決めたのかと思いました。ですが、放送では何も言ってないのですから、本当にチャラかどうかはわかりません。もしかした

ら、宅Q便クイズの点数にお泊り300問クイズの点数をプラスして勝者を決めたのかもしれませんが。それにしても、宅Q便クイズの勝者が10チーム中2チームしか残らなかったのは厳しいですね。わたしもお泊り300問が終わったときは半ばあきらめ顔でしたので、通過が決まって大歓喜でした。

16と39

準々決勝は、ホテルの大広間で行われた「オーケストラクイズ」。

そもそもわたしは吹奏楽部で、クラシック音楽は得意分野でした。チームメイトのひとりも同じく吹奏楽部。ですので、会場に入る前、大広間からオーケストラの音が聞こえた瞬間、このクイズはもらったつもりでおいりました。

そして件のリヒャルト・シュトラウス作曲「ツァラトゥストラはかく語りき」。音楽の演奏が終わった後で問題が読まれます。「この曲が初めて使われた映画のタイトルは」。

ここでわたしのチームのボタンがつきます。だれが押したかはわかりません（わたしではなくチームメイトのどちらかでしょう）。福留さんは勢いで問題

文を「いまから」まで読み上げていました。わたしはボタン音にかき消されて「曲のタイトルは」の後に「何？」ではない続きの言葉があったことはわかったのですが、「いまから」かどうかはわかりませんでした。

チームメイトのふたりが、まずいと焦っています。黙っていれば不正解です。わたしは、どうせ間違いならば何かウケをねらった答えをしようと思いました。

高校生クイズは計算問題が多いことを思い出しました。この曲が使われた映画といえば「2001年宇宙の旅」。今は1985年。だったら引き算をして「16年後!」。叫ぶように言いました。それが正解でした。

クイズの博物館にも展示されていた、「高一時代」でのインタビューでは、当時のわたしは「『いまから』まで聞こえ

たので『いまから何年後』と考えて『16年後』と答えた」と言っています。ですがあれは、説得力がありそうな解答理由を自分でこじつけた方便でした。

「16年後」で正解すると、学校指名クイズで「じっちゅうはっく、しくはっく」。わたしの脳内で漢字に変換されます。十中八九、四苦八苦。「出てくる数字全部足すと」。はい押しました。計算しました。

「 $10 + 8 + 9 = 27$ 。 $4 + 8 = 12$ 。 $27 + 12 = \dots$ 」そう思考回路が働きました。「39！」大広間によく響く声で、うれしい勝ち抜けを決めました。

もう1つの仙台第二高チーム

テレビを見ていればわかりますが、この回で仙台第二高校はもう1チーム全国大会に進出しておりました。同じ学校の同じ一年生ではありましたが、わたしにとっては予選当日まで知らない三人組でした（チームメイトとは同じクラスでしたので知り合いのようでした）。

彼らとは、地方予選のYES・NO電車移動クイズで近くの席にいたので顔見知りになりました。その後、全国大会出場が決まるまでずっといっしょでした。

ひとつの学校から複数チームが全国大会というのは、ブロック制だったからこそあったことです。第6回以降、各県代表制度が厳格になった時代にはありません。最近になって、ネット予選な

どが始まってからは、また可能になりましたが。

そんな彼らも準々決勝のオーケストラクイズは残りましたがそこで敗退。けれども、スタッフの厚意で、彼らも（自費で）決勝の日まで東京に残ってよいことになりました。おかげで、決勝までの数日間のオフの日は、スタッフさんに付き添われていたものの、年末の東京で彼らも加えて修学旅行的な楽しい日々を過ごしました。ディズニーランドの決勝の観客席に、彼らも映っています。

そしていろいろ

準決勝は今では臨海副都心になっていそうな埋立地での「宝探しクイズ」でトップ抜け。

決勝はディズニーランドで。いかりや長介さんと三田寛子さんを生で見ました。序盤は仙台第二は独走状態で、(仙台第二対竹原対東筑が) 6対1対1だったときもありました(放送ではカットされた)が、その後誤答を重ねて、1対4対3まで落ちたこともあります。でもそこから復活して、最後は10対7対7で勝ちました。

後日談ですが、翌年の第6回高校生クイズの前に、旺文社(当時高校生クイズと協賛してました)の雑誌「高一時代」が学校まで来て、3人で取材を受けました。そのときの誌面のコピーは、クイズ

の博物館にも展示されていきました。

第6回と第7回の高校生クイズは、部活やら勉強やらが忙しいという理由で参加しませんでした。チームメイトは他の人とチームを組んで参加してましたが、予選で落ちました。

わたしは大学生になり、東京に出てきて、TQC（東京大学クイズ研究会）に入会し、あちこちのクイズ番組に顔を出させてもらいました。特に第13回アメリカ横断ウルトラクイズでは東京ドームを抜けて成田空港まで行きました。じゃんけんでは秋利美紀雄さんと対戦して負けました。

高校生クイズの事前番組で、過去の優勝チームが集まる企画がありまして、それに出演するため日本テレビに行ったこともあります。また、別の回の事前番組の「頭を使う名解答集」で、わたしの

「39！」が使われたこともあったそうです（わたしはその番組を見てなかった）。

わたしもいろいろとありまして、名前や外見も変わりましたが、クイズの世界にはなぜか復帰しつつあります。

最近の高校生クイズは、「知の甲子園」路線と「高校生ウルトラクイズ」路線が拮抗して、中途半端になっているように見えます。個人的な願いでは、「知の甲子園」と「高校生ウルトラクイズ」を別々の番組でやればよいと思うのですが、製作費の都合で難しいんでしょうか。とにかく、何らかの形で、高校生クイズが末永く続くことを願います。

そして、いつか再び母校が優勝する日を待ち望んでいます。